

伝書鳩

第7号

井上靖記念文化財団

ご挨拶

皆様お久しぶりでございます

この度は伝書鳩セ号を出す

ことになりました

おかげさまで私も元々気でをります

これからよろしくお願い申し上げます

平成十九年二月一日

井上ふみ



明方 井上靖……………4

洛北の旅 森井道男……………6

井上靖の手、一瞬を生み出す創造主に 宮崎潤一……………8

『風林火山』を楽しむ……………11

井上靖生誕百年 行事予定……………12

酒田の井上靖展 安井収蔵……………14

井上靖記念室設置のご報告 豊泉豪……………18

これまでの井上靖文化賞受賞者……………20

井上靖文化賞・要項……………21

井上靖文化賞

第九回井上靖文化賞 安田侃氏に……………22

第十回井上靖文化賞 本間一夫氏と日本点字図書館に……………24

第十一回井上靖文化賞 直木孝次郎氏に……………26

第十二回井上靖文化賞 中村稔氏に……………28

旭川読書会からの発信 秋岡康晴……………30

第十四回井上靖文化賞の決定……………33

私の備忘録より 浦城いくよ……………34

平成十三年度～十七年度 事業報告 井上修一……………46

図書だより……………52

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子

明 方

井上 靖

新しいインキ壘の蓋を開けると、ブルー・ブラックの深海がある。太平洋もインド洋も、これに較べると何と小さいことか。私は大脳の手術をする医師のように、清潔な白衣を着、手を消毒薬で洗い、深海の一部を切りとって、小さい円筒形の器物の中に収める作業に取りかかる。

深海には新しい海流が流れ始める。鯨の群れと、無数の烏賊いかと、同じく無数の翔び魚が、S運河を抜け、K海溝へと殺到して行く。やがて、ごうごうたる音を立てて潮は渦を巻き始める。水位の低くなりつつある海を、国籍不明の艦船が走っている。

もうすぐ夜は明けるだろう。

〔地中海〕より

洛北の旅

森井道男（日本ペンクラブ会員・石川近代文学館専門委員）

朱い煉瓦の石川近代文学館の「井上靖を読む会」の皆さんと一緒に、京都を訪ねる小旅行に出た。井上靖が京都大の学生時代に住んでいた洛北の田舎道を、歩いてみたかったのだ。

等持院から御室の仁和寺に通じている裏通りの近くに、そのアパートはあり、農家や畑や小さい竹林が散在している静かな一帯だった。——と言ってもそれは、昭和七年（一九三二）から十一年（一九三六）にかけての頃の話で、現在は、家が立て込んで、すっかり変わってしまったている。

北野天満宮の方へも行ったが、けっこう観光の人々も多くて雑踏しているのに、仁和寺へ来てみると、うそのように静かで、人影はまばらだった。

の相手、岡山の六高や四国の松山高と戦うために、何本もの長いのぼり旗をなびかせて、金沢市街を行進する時に合唱した応援歌である。

かつて四高柔道部の主将だった靖もまた、「南下軍の歌」を繰り返し放歌高吟したであろう。そう思いながら、私は二十人ほどの人々と、静かな仁和寺の境内を歩いた。古来詩歌の中に登場して著名な八重桜は、まだ咲くには間があった。

背の低い桜の林は、やがてやってくる爛漫の日を待ちながら、ひっそりと静かだった。若き日の井上靖もまた、こんな午後を持ったのだろうか、と私は思った。

（平成十四年十二月十五日）

花ハ御室カ嵐山
人三春ノ行楽ニ
現モアラデ迷フ時
西洛陽ノ薄霞
霞ニマガフ砂煙
蹴立テテ進ム南下軍

靖が京都大へ入る前、大正十五年＝昭和元年（一九二六）から昭和五年（一九三〇）までのほぼ四年間は、金沢の第四高等学校（旧制）時代で、受験、在学のために金沢に住んだ。

南下軍とは当時四高柔道の選手団が、インターハイ



井上靖の手、一瞬を生み出す創造主に

宮崎潤一（伊勢崎市立あずま中学校教諭）

手というが高村光太郎の彫刻の「手」を想像する。

太く逞しい左手だ（三八・四センチメートル、一九一八年作、礫山美術館）。岩手県の高村山荘、厠に壁に彫られた「光」の一字と対になって、私の意識の中に強烈に定着しているから不思議だ。高村光太郎は私の中では「手」と「光」が基軸になっている。その垂線上に「道程」がある。高村光太郎の「手」のモデルは守衛の手であるという解説もあるが、彫刻の作品としての「手」は作者の意志を離れ、作品単体での主張を観るものに強烈にアピールしている。「手」は一度しか目にしていない。なにげない日常生活の中で、ともすれば意識が埋没しがちな昨今、連続する時間の中で、一瞬が煌めくときがある。悠久と対比する刹那で

ある。

その一瞬をうまく意識の額縁に入れられた作品が、立体作品であれ、平面作品であれ、文字言語であれ、受信する側に普遍性をもった共振を発生させるものだと思う。

筆者が井上文学の中で共振する部分の一要にこの「一瞬（刹那）」の存在があるのかもしれない。

突如、全く突如、人間の運命の途上に偶発するカ
マイタチ
（詩「カマイタチ」）

純粹無比の清冽さで襲ってきた
（詩「人生」）

突然つき上げてくる抵抗し難い血の愛情

（詩「愛情」）

必ずちらつと鳥影のように脳裡をかすめる思い出

（詩「葡萄畑」）

ふと、私はむなしい淋しさに突き落された

（詩「高原」）

などである。例示にはことかかない。その中でも強いて一つをあげるといふ課題が出されたら、筆者はいったん答えに窮したあと、しぶしぶ次の一文を例示する。

「遠くに郊外電車の青いスパークを沈めた二月の夜の底」（詩「半生」）である。郊外電車という日常性に対比する青いスパークという瞬間の事実。日常生活では見えない電流が電車を動かしているという現実を認識するとともにその青き瞬間性。その瞬間の中に瞬時に覗ける絶対無比とも言える

永遠、悠久なる事実の突然の認識。ここにまさにく三枝康隆や大岡信の言う詩的場が成立している。などとかつて書いた記憶がある。「一瞬」である。基本姿勢については今も変わっていない。しかし、主観と客観が交錯する詩的場の発生としての悠久の対立軸としての刹那、つまり「一瞬」が普遍的に存在するという視点については、我ながらも少し丁寧な説明が必要と反省している。

筆者はかつて、飛騨高山で井上と握手をしている。その手はやさしく、柔らかなものであった。ほんの数秒の握手であったが、そこにはある種のパワーがあった。

井上文学がこの手によって創造されたと思うと、感慨無量になった記憶がある。円熟した手であった。喜寿を過ぎた老人との握手が、何ほどの意味を持つかについて指摘する向きもあるだろう。主観に依りすぎ、どこにデータの客観性があるのかと……。しかし、芥

なにしろ柔道ですから（笑）。

（『わが文学の軌跡』一九七七年、九頁）

川賞受賞前後の作家、井上靖の手が写っている写真は、まさしく本文冒頭に書いた、高村光太郎の「手」に通底するパワーを発している。ごつくて、節くれ立った「手」である。また、柔道家の手である。相手を驚づかみにし、「一瞬」のタイミングで解放する強い逞しい「手」である。実際『父・井上靖の一期一会』には腕相撲をする父として、

組んだ父の手は、骨が太く、体温が高く乾いた感触で、親指の付け根が非常に肉厚だったことが印象に残っている。

（黒田佳子、潮出版社、二〇〇〇年、二十六頁）

と書かれている。柔道はすべて「一瞬」で決着がつく。井上靖自身は柔道についてかつて次のようにのべている。

柔道部生活を、自分の内部に入ってその内部から書くということは非常にむずかしいことですね。

しかし、その、柔道のもっている「一瞬」（凝縮されたブラズマにも似たエネルギー）は多くの初期詩を支える要素になっている。悠久と利那の原始宇宙に似ている。これらはやがて、後の小説群において、過去の一瞬の記憶が鮮やかな母を表現した「花の下」「月の光」などに。また悠久と利那でいえば、「星と祭」に見られる月見への表象などに転生している。

前掲した「遠くに郊外電車の青いスパークを沈めた二月の夜の底」を再度見直すとき「遠くに（遠景・傍観者の視点）郊外電車（日常生活）の青いスパーク（利那）」と読み解く鍵をごつくて、節くれ立った「手」は明示しているのである。そういった思いを巡らすとき、井上靖の手、一瞬を生み出す創造主に改めて畏敬の念をもつ次第である。

『風林火山』を楽しむ

平成十八年一月八日（日）、テレビ朝日の日曜洋画劇場特別企画で井上靖原作『風林火山』が上映されました。また、井上靖生誕百年にあたる平成十九年には、NHK大河ドラマに『風林火山』が登場します。

多くの関連本やコミックなどが出版されましたので、いくつか紹介します。

テレビを楽しく見るには

○『NHK大河ドラマ・ストーリー 風林火山 前編』（二〇〇七年一月、日本放送出版協会）

○『NHK大河ドラマ 風林火山 一・風の巻 原作 井上靖』（大森寿美男著、二〇〇六年十一月、日本放送出版協会）

山本勘助は実在の人物なのか？

○『甲陽軍艦』（佐藤正英校訂／訳、二〇〇六年十二月、筑摩書房）

○『山本勘助』（平山優著、二〇〇六年十二月、講談社）

○『山本勘助とは何者か——信玄に重用された理由』（江宮隆之著、二〇〇六年十一月、祥伝社）

昔の漫画が再版されました

○『片目の軍師』（二十世紀漫画叢書、平田弘史著、二〇〇六年十二月、少年画報社）

○『風林火山・武田信玄』（横山まさみち著、小堺昭三脚色、井上靖・宮崎惇原作、二〇〇六年九月、講談社）

映像の好きな方には

○映画『風林火山』（稲垣浩監督、三船敏郎主演、一九六九年、三船プロダクション）のDVD（『東宝セレクション』）

井上靖生誕百年 行事予定



平成十九年五月六日、井上靖は百回目の誕生日を迎えます。生誕百年には沢山の行事が予定されています。

◎旭川市立井上靖記念館

五月六日…誕生日に合わせてミニコンサート、朗読会
七月中旬…例年行われている「井上靖研究会」を当館にて開催

九月上旬…生誕百年記念朗読会（朗読と音楽）

十一月月上旬…生誕百年記念文学講演会

その他…特別企画展等

〒〇七〇—〇八七五

北海道旭川市春光五条七丁目五—四一

☎〇一六六—五一—一一八八

◎長泉町の井上靖文学館

生誕百年企画

『氷壁』・ナイロンザイル事件の山行き」

六月九日（土）上高地・西糸屋山荘にて

なお、現在生誕百年に向けて映像の楽しめる文学館に改装中

〒四一一—〇九三一

静岡県長泉町クレマチスの丘五一五—五七

☎〇五五—九八六—一七七—

◎県立神奈川近代文学館

収蔵資料展「生誕百年記念 井上靖展」

六月九日（日）～七月二十九日（日） 第三展示室

〒二三—〇八六二 横浜市中区山手町一一〇

☎〇四五—六二二—六六六六

◎軽井沢高原文庫

夏季特別展「生誕百年記念『井上靖展』」（仮）

七月二十七日（金）～九月二十四日（月）

〒三八九—〇一一一

長野県北佐久郡軽井沢町塩沢湖二〇二三

☎〇二六七—四五—一一七五

◎伊豆市天城湯ヶ島「しろばんばの里」

「井上靖生誕百年祭」天城温泉会館にて

平成十九年四月二十二日～平成二十年一月二十七日

四月二十二日（日）…オープニングステージ

市民劇団「しろばんば」公演等

五月六日（日）…メインステージ

座談会、朗読、音楽演奏等

平成二十年一月二十七日（日）…ファイナルステージ

墓参、記念講演等

その他（市内各地で）

リレー映画会、文学散歩、作品の読み聞かせ会、作品感想文コンクール、資料収集と展示、井上靖コーナーの設置

主催…井上靖生誕百年記念祭実行委員会

問合せ…伊豆市観光協会天城支部（しろばんばの里）

☎〇五五八—八五—一〇五六

また、伊豆市昭和の森にある「伊豆近代文学博物館」も井上靖生誕百年に向けリニューアル中。

酒田の井上靖展

安井収蔵（酒田市美術館長・毎日新聞名誉職員）

二〇〇二年五月、山形県、酒田市美術館で、「井上靖展——文学の軌跡と美へのまなざし」展を開きました。朝日新聞に連載された「氷壁」の舞台となったのが酒田市で、日和山には文学碑が立っています。その建立式にはご夫妻で来ていただいております。

展覧会は井上靖文学と美術家とのかかわり、その収集品を展示したものでした。読者の皆さんには十分、ご承知のことと思いますので、中身については省かせていただきます。美術記者の後輩として、ごく僅かな時代でしたが、そのかわりと思いい出について個人的にもうしあげたいと存じます。

私が毎日新聞社（東京）に入社したのは、日本敗戦の年の暮れでした。すでに、井上さんは大阪本社の美

術記者を経て、社会部のトップライターとして活躍、敗戦のあくる日に「聖断を拝して」という趣旨の社会面トップ記事を書いておられました。酒田の展覧会で、改めて拝見し「さすが名文家」と、いくたびも繰り返し読み返したものでした。展示品の数々から、お付き合いの広さを感じました。

心ひそかに大小説家を志し東京に転勤、有楽町の新開社新館五階の出版局、図書編集部で本作りに精を出しておられました。編集局は四階にありました。めばしいビルは占領軍に没収され、軍服姿がウロウロしていました。毎日新聞にもオーストラリア軍機関紙「ビーコン」米国UPI通信社の支局がありました。用紙がないので新聞は半ペラ、仕事らしい仕事もなく呑気

な良い時代でした。

用紙を確保するために各新聞社とも、毎日新聞は東京日日新聞を、読売は報知新聞をといた具合に子会社を作り夕刊紙を発行しました。こうして政府から新聞用紙の配給を受け親会社の方に横流ししていたようです。報知新聞こそスポーツ紙として残りましたが、用紙が豊富に出まわるようになると夕刊紙はバブルのように消えてなくなりました。こんな時代でしたから井上さんは、それこそ鼻歌まじりの勤務ではなかったかと思えます。

私は東京日日新聞に回されました。風俗小説家、浜本浩の「浅草の肌」という連載の担当で、荻窪の浜本邸で原稿を貰い、書き写した原稿を持って谷中の挿絵画家、田代光邸に出かけ、挿絵が出来上がるまで居つづけ、ときには朝まで待ち、ようやく夕刊に間に合わせるようなことも、しばしばでした。一年も続いたでしょうか。そして「浅草の肌」を単行本として毎日新聞から出すことになりました。

そのとき、初めて井上さんにお会いしました。が、

当時は、井上さんが、どんな経歴であるのか、よもや文化勲章受章者になられるような人とは、少しも思いませんでした。新聞社の先輩として、少しばかりの尊敬があっただけで、かなり、ぞんざいな口の利きかたをしたのではないかと思っています。「浅草の肌」の作家と比較することは出来ませんが、単行本の制作に当たり、もしかしたら「僕のほうが、もっと巧いのに」と思われていたかもしれません。

当時の印象としては偉ぶらない、口数の少ない、謙虚なお人柄だったと思います。「闘牛」「猟銃」という名作がひそかに書かれていたと思います。作家となるために、その道の人々と顔見知りになるためには、住みなれた関西を離れなければならなかったのでしょうか。文芸春秋本社が東京に、同人雑誌の発行所、芥川賞、直木賞の選考委員が首都圏に書斎を構えていたので、単身赴任の不便を忍ばねばならなかったのでしょうか。

一九五〇年、昭和二十五年、毎日新聞は名古屋で印刷を再開することになり、私は名古屋に転勤となりました。私にとり生まれ故郷です。井上さんの戦友、

野々村一男さんに会いました。日展の彫刻家、今は芸術院会員です。百歳を迎えた平成十八年、日展にも出品されていました。私の叔父も野々村さんとは軍隊で一緒でした。ですから、井上さんともお知り合いだったかもしれません。野々村さんは、陸軍病院で、一緒にいました。「井上の奴、はやり歌ばかり歌っていたよ」と病院での日常茶飯事を聞かされたものでした。

そのころ、井上さんは文壇の人気作家です。文芸春秋社主催の文芸講演会が名古屋で開かれることになり、井上さんと何年かぶりにお会いしました。当時の編集局長が狩野近雄というヘンな名物人間で、「お前、インタビューして記事にしろ」ということで、新聞社と同じビルにあった宿舎のホテル・ニューナゴヤで、話を聞き取りました。狩野の課題は「名古屋と井上靖」ということでした。

井上さんは、名古屋名物の味噌煮込みうどんをフウとすすりながらのお喋り、なにをお聞きし書いたのか、もう古い話で記憶にありません。が、味噌煮込みうどんの情景だけは、きのうのこのように浮かん

できます。お生まれは台湾、本籍をどこに置かれていたのか、名古屋生え抜きの野々村さんの戦友で第三師団（名古屋）の陸軍病院におられたのか、不思議に思えます。

名古屋での勤務が十三年半、東京の学芸部に戻り、美術記者となりました。記憶にあるのは井上さんが「流沙」の連載を始められたときです。「僕の連載には挿絵は似つかわしくない、装画にしてもらいたい」と注文で、一人の画家が十回分、担当し、リレーのようにバトンを渡していくという形でした。平山郁夫さんなどにも登場していただきました。ほっと、一息をつく装画でした。

井上さんは、時々、新聞社に顔を出されていたようです。もう古いお話になりました。大阪での井上さんの後輩、山崎豊子さんも小説家として大成されていました。ご主人の杉本亀久雄さんは学芸部の同僚で美術記者、モダンアート協会の画家でもありました。日動画廊で個展を開かれるほどでしたが、ことのほか早く世を去られました。大阪学芸部は才能に満ち溢れた逸

材を世に送り出しましたが、今は昔であります。

さて、酒田市美術館での展覧会でしたが、初日に井上家一族の皆さんにご出席していただき、文人俳優、児玉清さんに講演していただきました。定員百人の会場に三百人が押し寄せ、大変な混雑でした。市役所からお叱りを受けましたが、こんなお叱りなら幾たび受けても結構と思っています。思い出すままに綴りました。誤りがあるかもしれませんがお許しください。

（平成十九年一月）



井上靖記念室設置のご報告

豊泉豪（日本現代詩歌文学館学芸員）

日本現代詩歌文学館では、二〇〇二年五月二十五日、名誉館長井上靖先生の常設記念室を開設させていただきました。

少年期に詩によって文学と出会われた井上先生が、晩年に至るまで詩作を続け、その情熱に比例する質と量の作品を残されていることは周知の事実です。そして先生の詩への思いの一つの形として、本文学館へのご尽力があったことは、関係者一同の胸に深く刻まれています。

本誌二号でもご紹介されているとおり、井上先生の記念館や記念室はすでに全国に数多く設けられています。これは日本の文学者としてはほとんど例をみない現象ではないでしょうか。その中で、本文学館の記念

室はあくまでも詩人としての井上先生に重点を置いたものとなっています。

まず、第一詩集『北國』の有名なことば「自分の作品が詩といふより、詩を逃げないやうに閉ぢ込めてある小さい箱のやうな気がした」から、部屋の基本イメージを箱、宝石箱とし、さらに幼少期を過ごされた土蔵のイメージを基調として全体がデザインされています。四十平方メートルに満たない小さな、そして心の原風景を思わせるようなこの空間は、時代や国境を越えて限りなく広がっていく井上先生の小説世界に対する、求心的に凝縮される詩の世界そのものを表しています。

土壁風の壁面には、小さな扉が設けられており、そ

こを開けると井上先生の筆跡や詩作品を透かして、さまざまなイメージがからくりのように動的に展開するほか、井上先生の詩に関する発言が映像・音声によって流れるなど、さまざまな仕掛けが組み込まれています。また同様に壁にはたくさんさんの覗き穴があり、先生の時々の表情を見ることができます。

時にしゃがみこんだり、あぐらをかいたり、ちょっとしただけ背伸びをしたり、また踏み台に乗って、これらの仕掛けを楽しんでもらいながら、井上先生の詩の世界にゆっくりと浸ってもらえるよう、室内では靴を脱いでいただくことにしています。

一つ一つの作品をその場で完結して味わうことができるのは、詩歌文学館の展示の大きな利点です。できるだけ多くの作品に触れていただけるよう、そのための環境作りに工夫を凝らしました。

展示資料は詩集をはじめ、詩の初出雑誌や色紙などの揮毫品、そして目玉は何とんでも直筆の詩稿になります。記念室の設置に先立って、井上靖記念文化財団様より、第一詩集『北國』所収の作品から、最後の

詩集『星闌干』に掲載されているもので、二百点以上のにぼる詩稿をご寄贈いただきました。本文学館の至宝ともいふべきこの詩稿の中から一時に展示できるのはごく一部ですが、徐々に内容を入れ替えながら公開していきたいと考えています。文字を崩すことなく升目にそって一字一字丁寧に書かれた詩稿からは、「正確なものだけが美しく見える」という先生のことばに表された思想そのものすら読み取ることができるようになっています。

また、室内にはタッチパネル式の端末を設置し、所収詩集やタイトルはもちろん、詩句からも作品が検索できるようになっています。さらには一階閲覧室に〈井上靖コーナー〉を設け、詩集ばかりでなく、小説やエッセイ、井上先生に関わる研究書などを常時開架しています。

もとより、この記念室は井上先生の全詩業を展観でき得るものではなく、ましてやその文学の全貌を紹介する規模のものではありません。多くの日本人が少年時代に読んだ『あすなろ物語』や、小説ばかりでなく

映画や舞台なども通して遙かな歴史ロマンに胸を躍らせた『天平の甍』『風林火山』、そして人生の深淵に思いを至らせた『孔子』などを生んだ作家井上靖の、文学の核、エッセンスに触れていただきたいと願っているものです。ご自身の詩を「小さな箱」に喻えられた井上先生が、設立と運営に情熱を注がれた詩歌文学館にある小さな小さな記念室。ここで一人でも多くの来館者に、広大で深遠な井上文学の世界への扉を開くきっかけを提供できればと願っています。

(平成十四年八月)

これまでの井上靖文化賞受賞者

- 第一回 小澤征爾氏(指揮者)
- 第二回 ドナルド・キーン氏(日本文学研究者)
- 第三回 陳舜臣氏(作家)
- 第四回 白土吾夫氏と日本中国文化交流協会
- 第五回 梅原猛氏(哲学者)
- 第六回 加山又造氏(日本画家)
- 第七回 大野晋氏(国語学者)
- 第八回 白川静氏(漢字学者)

井上靖文化賞・要項

この賞は井上靖を記念し日本文化の向上に資するために、文学・美術・歴史等の分野において優れた業績をあげた人・団体を顕彰するものである。(財団設立は平成四年、第一回の顕彰は平成五年)

対象

文学・美術・歴史等の分野における創造的な芸術活動や、卓抜した学術の成果ならびに多年にわたる実践や地道な研究で、今後の一層の活躍が期待されるもの。(当年度の業績に限らない)

選考

文学・美術・歴史等の各界における専門家および作家・評論家・ジャーナリストなど多数の方々から贈賞対象の推薦を広く求め、理事長の委嘱する選考委員会で決定する。

贈賞

顕彰は年一回とし、原則として複数贈賞は行わない。賞状および記念レリーフ、賞金一〇〇万円を贈る。

運営

井上靖記念文化財団が主催し、一ツ橋綜合財団がこれを後援、実施にあたって協力する。

選考委員

大岡信 菅野昭正 樋口隆康 平山郁夫
(五十音順・敬称略)

事務局

東京都千代田区神田神保町二一十七―十共同ビル
財団法人 一ツ橋綜合財団内
「井上靖文化賞」事務局
☎〇三―三三三―六〇六二

第九回井上靖文化賞 安田侃氏に



受賞者の安田侃氏と文子夫人

平成十三年十一月十五日、第九回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、「安田侃氏」に贈賞が決められました。
平成十四年一月三十一日、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

安田侃（やすだ・かん） 彫刻家

一九四五年一月五日 北海道美幌市に生まれる

一九六七年 北海道教育大学岩見沢分校卒業

一九六九年 東京芸術大学大学院彫刻科修了（舟越保武教室）

一九七〇年 イタリア政府招聘国費留学

ローマ・アカデミア美術学校でペリクリ・ファッツイーニに師事

一九七三年 トスカーナのピエトラサンタにアトリエを構える

一九九一年 ミラノ市主催野外彫刻個展

一九九二年 芸術選奨文部大臣新人賞受賞

一九九四年 ヨークシャー・スカルプチャー・パーク野外彫刻個展

一九九五年 ピエトラサンタ市主催野外彫刻個展

世界のヴェルシリア賞受賞

一九九九年 パリ市主催「彫刻の野2、シャンゼリゼ展」出品

二〇〇〇年 ファイレンツェ市主催野外彫刻個展

二〇〇一年 東京都庭園美術館野外彫刻個展

主なモニュマン

東京国際フォーラム、シニアワーク東京、J R東日本総合研修センター、アルテピアッツァ美唄（北海道）、酒田市美術館、パルコソラーリ（ミラノ）、ブリッジウォーターホール（マンチェスター）、オーロラブレイス（シドニー）、ボーボリ公園（ファイレンツェ）、テネリフエ（カナリア諸島）

選考委員のことばから

「きわめて日本的なもの」 平山郁夫

彫刻といっても、室内に置くこぢんまりしたのではなく、街角に立つ壮麗なモニュメント——野外彫刻は、ヨーロッパではギリシア・ローマ時代以来の輝かしい伝統がある。

その本場のイタリアに腰を据えて制作にうちこみ、安田侃さんは高い評価を受けている。これは安田さんがきわめて日本的なもの、日本本来のものをしっかりと持ち、それを武器にしているからだと思う。西洋のものまね、コピーでは絶対通用しない。私の友人にも、イタリアに住み、彫刻家として悪戦苦闘していた人がいたが、結局、日本人のアイデンティティーをとり戻すことで成功した。藤田嗣治さんが向こうで喝采を受けたのも、日本画の造形技法を油絵で生かしたからだ。石を彫る安田さんの芸術の凄まじいインパクトは、斬新な近代性の底にある日本人のアイデンティティーによると考える。

第十回井上靖文化賞

本間一夫氏と 日本点字図書館に



受賞者の本間一夫氏

平成十四年十一月十九日、第十回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、「本間一夫氏と日本点字図書館」に贈賞が決まりました。

平成十五年一月二十八日、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

本間一夫（ほんま・かずお）

社会福祉法人「日本点字図書館」創設者、現会長

一九一五年十月七日 北海道増毛郡増毛町に生まれる

一九二九年 北海道函館盲啞院入学

一九三九年 関西学院大学文学部専門部英文科卒業

一九四〇年 日本盲人図書館（現社会福祉法人・日本点字図書館）を創立。館長に就任

一九五三年 朝日社会奉仕賞受賞

一九五六年 身体障害者更正援護功労で厚生大臣表彰を受ける

一九六七年 点字毎日文化賞受賞

一九七一年 藍綬褒章受賞

一九七七年 吉川英治文化賞受賞

一九七八年 日本点字図書館理事長に就任

一九八二年 毎日社会福祉顕彰受賞

一九八五年 勲四等旭日小綬章受章

一九九〇年 増毛町長より表彰を受ける

一九九一年 東京都社会福祉大会で表彰を受ける

二〇〇〇年 日本点字図書館創立六十周年を迎える

二〇〇一年 日本点字図書館会長に就任

著書に『指と耳で読む』『点字あればこそ』『我が人生』『日本点字図書館』がある。

選考委員のことばから

「希望の灯火の更なる輝きを！」 菅野昭正

幼くして失明した塙保己一が、国学者として挙げた業績の大きさを教えられて驚嘆したのは、まだ小学生だった頃である。ヘレン・ケラーが三重苦を克服してゆく経緯の物語を読んで感動したのも、同じ頃だった

と思う。かなり後になって、点字を意味するフランス語 braille を覚えたときには、その発明者であるルイ・ブライユの存在に畏敬を禁じえなかった。

本間一夫氏のお仕事、「日本点字図書館」の六十年を越える活動の歴史のことは、かなり以前から聞き知っていた。それは私にとって、いま述べた幼時からの三つの感銘を新たにするものであった。そして同図書館の現在の充実ぶりを知ると、本間氏及び関係の方々のご努力への敬意はいっそう深くなる。視覚障害者の方々にとって、これは大きな希望の灯火であつたにちがいない。今回の慶事を期に、灯火がますます大きく明るく輝くよう心からお祈りしたい。

「追記」本間一夫氏は平成十五年八月一日にお亡くなりになりました。

第十一回井上靖文化賞

直木孝次郎氏に



受賞者の直木孝次郎氏(右)とご家族

平成十五年十一月二十五日、第十一回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、「直木孝次郎氏」に贈賞が決まりました。
平成十六年二月二日、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

直木孝次郎(な おき こうじろう)

日本古代史研究家、大阪市立大学名誉教授

実証に徹した穏健な論文は、弥生時代から奈良時代までにまたがって五百編にも及び、隠された歴史、史実に新たな光をあてた。また、全国の遺跡保存運動にも尽力した。

一九一九年一月三十日 兵庫県神戸市に生まれる

一九四三年 京都帝国大学文学部史学科卒業

十月、海軍に入る

一九四六年 京都大学大学院特別研究生となる

一九五〇年 大阪市立大学助手となる

以後、助教を経て教授に就任

一九五四年 友人と計り『続日本紀研究』を創刊

一九六二年 「難波宮址を守る会」代表となる

一九八一年 大阪市立大学を退職。以後、岡山大・相

愛大・甲子園短大の教授を歴任

一九八九年 「大阪文化賞」受賞

一九九三年 ゴルフ場建設を阻止するため、「吉野を

愛する会」会長に就任

二〇〇〇年 文化財保存に尽力したことにより第一回

「和島誠」賞 受賞

著書に『日本古代国家の構造』『持統天皇』『日本古代の氏族と天皇』『神話と歴史』『飛鳥奈良時代の研究』『夜の船出』『続日本紀』(口語訳) などがある。

選考委員のことばから

「日本古代の歴史観を大きく転換」 樋口隆康

直木孝次郎氏は、日本古代史の研究者であります。

戦前・戦中は皇国史観が歴史学会で支配的でありまし

たが、戦後は津田左右吉、井上光貞氏らと共に、直木氏も、原典である古事記、日本書紀の批判を通じて、古代史の実証的研究を推進し、日本古代の歴史観を大きく変えた学者の一人であります。歴史教育の右傾化を憂い、しばしば積極的に発言されたこともあり、さらに、直木氏は飛鳥京や難波京調査への関与から、古代史研究の資料として重要な史跡が無秩序な開発によって破壊されるのを嘆き、遺跡の保存運動も積極的に進めておられます。

その一方で、直木氏は古代の美術と近代の文学への関心も強く、美術では法隆寺の研究に熱中し、文学では武者小路実篤の白樺派に傾倒し、また、明星派をも愛好して、山川登美子を高く評価し、自らも短歌集を刊行されました。年初の宮中歌会始の召人にも選ばれました。

直木氏に井上靖文化賞が贈られることは、この賞にとってもまことに慶ばしいことであります。

第十二回井上靖文化賞

中村稔氏に



受賞者の中村稔氏

平成十六年十一月十七日、第十二回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、「中村稔氏」に贈賞が決められました。
平成十七年二月一日、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

中村稔（なかもら・みのる）

詩人、評論家、弁護士、日本近代文学館理事長

詩人としての長年にわたる活動。また、日本近代文学館理事長として館の運営に尽力、さらに弁護士としての知的財産権の確立にも大きく貢献した。

一九二七年一月十七日 千葉県木更津市に生まれる

一九五〇年 東京大学法学部法律学科卒業

処女詩集『無言歌』を刊行

一九五二年 第二東京弁護士会に弁護士登録

一九六七年 『鶴原抄』により高村光太郎賞を受賞

一九七七年 『羽虫の飛ぶ風景』により読売文学賞を

受賞

一九八八年 『中村稔詩集一九四四～一九八六』により芸術選奨文部大臣賞を受賞

一九九二年 『浮泛漂蕩』により藤村記念歴程賞を受賞

一九九八年 日本近代文学館理事長に就任

日本芸術会員に選ばれる

二〇〇四年 『私の昭和史』を刊行

選考委員のことばから

「端正な抒情詩、緻密な詩人論」 大岡信

中村稔の『無言歌』は戦後詩人の詩集の中で最も早い時期に出た屈指の抒情詩集だった。きびしく磨かれた簡潔な日本語で、多く十四行詩の詩型を守りつつ書かれた抒情詩は、たとえば立原道造の軽やかな十四行詩とは異質な、沈痛な激情とでもいべき感情を造型して読む者を魅了した。ストイックな断念の抒情とよべるような世界が、中村稔の端正な抒情詩の根本をなしていると思ふ。

中村稔は著名な弁護士の仕事を忙しく続ける一方、

『鶴原抄』『羽虫の飛ぶ風景』『空の岸辺』『浮泛漂蕩』『新輯・幻花抄』などの詩集を刊行。それに並んで『言葉なき歌——中原中也論』『宮沢賢治』という、若かりし日から持続してきた二人の近代詩人論を、驚くべき緻密さで補強し続けてきた。詩歌人研究では、もう一人の巨人・斎藤茂吉についての論があり、これらを取りかこんできわめて多彩な詩人論があつて、中村稔の身近の人々に関するこよなきポートレート集を形づくっている。

さらに、現在、日本近代文学館理事長として、日本全国の文学館めぐりを折にふれて実行し、貴重なアドヴァイスの数々を多くの文章で公表している。これは篤実な行動派知識人の軌跡をみごとに示すものだ。愛する夫人を近年に喪われたことは痛恨事というも愚かなことだったが、その痛みにも耐えて『私の昭和史』や『中村稔著作集（全六巻）』をたて続けに刊行中であることは、まことによろこばしい。

旭川読書会からの発信

秋岡康晴（旭川井上靖読書会「講師」）

旭川生まれの文豪井上靖の読書会が発足して丸七年の歳月が経過したのを契機に、会員の二人に読書会にまつわる思い出、近況報告、今後の抱負、読後感などを一つづついただいた。原文そのままを紹介（順不同）させていただく。

▼「読書会と私」 神林正恵

平成九年八月二十三日、私が読書会にご縁をいただいた日である。入会に到るまでの経緯は、当時編集に携わっておられた秋岡康晴先生のご好意で火曜会誌『VITA』の終刊号に拙文ながらページをいただき、光栄に思った。

予後の身を緊張の面持でお仲間入りさせてもらってから、はや五年の歳月を迎えようとしている。初回の『楼蘭』の中の一編「洪水」に始まって十六冊目の『楊貴妃伝』に到って益々靖文学の奥深さに感嘆の念を強くした。

記念館には歩いて十分とはからぬ近距離に住いして居り何時でも行けるとの思いが、足を遠のかせていたように思う。読書会発足当初から参加できなかったことを悔みながら既に皆様を読み終えていた自伝小説は井上靖を知る上で必要かくべからざるものと思い、記念館からお借りして『私の自己形成史』『幼き日のこと』『しろばんば』『夏草冬濤』『あすなる物語』と遅ればせながら追いつくことができた。『幼き日のこ

と』や『しろばんば』では記憶力の旺盛さに感心させられ、記念館に飾られてある靖の面影に合わせて好意を持って書物に親しむことができた。一人では読みおおせなかったであろうと思われる『蒼き狼』や『敦煌』『おろしや国酔夢譚』等の西域物や、歴史小説を輪読の形態で読破して来たことは意義があったと思う。会員の皆様との一期一会を大切にこれからも井上靖文学に親しんで行きたいと思っている。

▼「読書会に仲間入りして」 小杉山美禰子

私は目の不自由な方のための朗読（音声訳）のボランティアをさせて頂いています。需要はサスペンス物が多く、それはそれで耳で聞く人が理解できるようにアクセントに気をつけ、意味句通り（意味が途切れないように）読み、間をとりイントネーションを大切に気をつけながらテープに録音する。私にとっては意味のある、やりがいのある仕事です。しかし純文学物を読みたいという強い思いが、読書会に仲間入りさせて頂くことによって適えられました。秋岡康晴先生のご

指導のもと、井上靖の世界を深く味わい、入りこんでゆきたいと思います。『楊貴妃伝』も残り少なくなりましたが、読み進んでゆく程に、中国を旅してみたいという夢が生まれました。『長恨歌』を詩吟で味わうという経験もさせて頂き、私の中での読書会の存在は大きなウェイトを占めています。雑用が多く休むことが多々あることが残念ですが、抜けた部分は必ず家で読むように心がけております。

神林さんは井上靖ナカマドの会主催、靖文学ゆかりの旅にも積極的に参加され、会の世話役的存在、小杉山さんは身体にハンディをお持ちのかたにも健常者同様の体験を少しでも分かち与えることに生きがいを見出すおかたです。

活字離れの今日、文豪といえども文庫本の入手できにくい状況（角川文庫『化石』も揃えるのに苦労、現在鑑賞中）が続いています。清水蓮雄館長、高島義和先生（囑託）、遠方、町田市から時折ご参加の浦城いくよさんらのアドバイスも仰ぎながら、旭川市民の

方々に浸透し、親しまれる読書会にならんことを切望してやみません。

(平成十四年三月)

追伸

二〇〇七年春に『旭岳の裾野にて——井上靖生誕百年に寄せて』を上梓させていただきました。ご覧くださればうれしいです。

第一章 井上靖文学に魅せられて

第二章 井上靖と旭川

第三章 井上靖のエッセー・初期小説、自伝

第四章 井上靖の海外の歴史小説——私のシルクロードの旅、夜光杯

第五章 旭川井上靖読書会



第十四回井上靖文化賞の決定

平成十八年十一月二十日、第十四回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、「志村ふくみ氏」に贈賞が決められました。

志村ふくみ（しむら・ふくみ）染織家

母の導きと独学で植物染料（草木染）による色をひたすら追い求め、豊かで繊細な色彩の紬織りをきわめて芸術性の高い作品へと発展させた努力と功績は高く評価される。また、さまざまな人と色との出会いや自己形成について語ったエッセイも秀逸である。

一九二四年九月三十日 滋賀県近江八幡に生まれる

一九五五年 母の手ほどきを受けて染織を始める

一九五九年 第六回日本伝統工芸展で文化財保護

委員長賞を受賞

一九六四年 第一回作品展を資生堂ギャラリーで

開催

一九八三年 第一回京都府文化功労賞を受賞

エッセイ『一色一生』により第十回

大佛次郎賞を受賞

紫綬褒章を受章

一九九〇年 重要無形文化財保持者（人間国宝）

に認定される

一九九三年 『語りかける花』で日本エッセイ

スト・クラブ賞を受賞

文化功労賞に選ばれる

選考委員（五十音順・敬称略）

大岡信 菅野昭正 樋口隆康 平山郁夫

贈賞式は平成十九年二月

二十三日（金）、

山の上ホテルで開催。



浦城いくよ

平成十三年度～平成十七年度



平成十三年度

米子の井上靖記念館へ行き、展示の点検や報告を聞く。

鳥取県日南町立文化センターの中にある美術館へ。

午前十時半、学芸員の浅田裕子さんが車で米子の井上靖記念館へ迎えに来られる。矢田町長、七瀬助役に役場でお目にかかる。六月に開催する「井上靖が撮った写真展」の準備の打ち合わせを文化センターの中の井上靖記念室で浅田学芸員と行う。

中国作家代表団の団員として来日した

五月十六日

山形県酒田市立美術館の安井収蔵館
長と備前健吾学芸員が井上家に来宅。
「井上靖展」を開きたいと話される。

旭川市立井上靖記念館の古田辰雄館長
上京。記念館の十周年に向けての模様
替えと展示替えの打ち合わせをする。
井上家で。

五月十八日

日南町立文化センターで行う写真展の開催にむけて山陰中央日報に掲載する原稿「ウズベキスタンの旅に父を思う」をやつと書き上げ、ポストする。

五月二十五日

ウズベキスタン旅行でお世話になった

五月二十八日
鑑真和尚ゆかりの地、中国の揚州から佐賀に贈られてきて父の碑「若葉して」の周囲に植えられた瓊花（はな）を守り育てている植木屋の久保田さんより電話があり、昨年湯ヶ島の父のお墓に植えた瓊花に肥料をやるようにとのこと。
氣にかけて下さっていてうれしい。

六月五日〜七月十五日
「井上靖が撮った写真展——アフガニスタン・イランの旅から——鳥取県日南町立美術館で開催。この催しは靖没後十年に当たり、美術館の五周年記念特別展として開かれた。日南町は戦争中井上家の家族が疎開をしていた所。午前中テープカット、祝辞、私の挨拶、

五月二十八日

鑑真和上ゆかりの地、中国の揚州から佐賀に贈られてきて父の碑「若葉して」の周囲に植えられた瓊花（けいか）を守り育てている植木屋の久保田さんより電話があり、昨年湯ヶ島の父のお墓に植えた瓊花に肥料をやるようにとのこと。気にかけて下さっていてうれしい。

六月五日～七月十五日

「井上靖が撮った写真展——アフガニスタン・イランの旅から」鳥取県日南町立美術館で開催。この催しは靖没後十年に当たり、美術館の五周年記念特別展として開かれた。日南町は戦争中井上家の家族が疎開をしていた所。午前中テープカット、祝辞、私の挨拶、

詩人の李小雨女史と翻訳家の陳喜儒氏が母ふみを訪問された。李女史は北京大学を卒業し、現在「詩刊」の副編集長をされている。父上の李瑛氏も二回井上家を訪問して下さり、父とは何度もお会いしている。李瑛氏の「井上靖先生に捧げる詩」の一節を紹介する。

あなたは日本の海を熟知しているが、心は中国北方の砂漠においている
蒼茫とした、暴戾な、苦渋と野性に満ちた中国の古い砂漠

（「日中文化交流」より）

四月二十日

日南町の浅田学芸員上京され、写真展への出品物の打ち合わせを行う。写真だけのつもりが何だか他の品へと広がっていく。小山乃り子さんといくよ対応。

四月二十九日～五月七日

ウズベキスタン旅行、夫の恒雄と。か

修一が「父井上靖について」と題して講演。修一、甫壬、いくよ、出席。

六月七日

米子の「井上靖記念館友の会」の文学散歩。記念館からバスで出雲伝承館、旧本陣記念館などを見学。

六月十四日

酒田美術館の備前学芸員と展覧会について井上家で打ち合わせ。小山さん、いくよ。

六月二十一日

團伊玖磨氏葬儀。午後一時から護国寺にて。修一と参加。雨。作曲家で日中文化交流協会の父の次の会長。昨年六月「團伊玖磨の世界」がサントリールで開かれ、恒雄と出かけた。管弦楽組曲「シルクロード」他の指揮とトークがあり、トークの中で一緒に旅したシルクロードでの父の姿を語って下

さった。著書「パイプのけむり」の中でも父のことがいろいろ書かれている。前年の四月に和子夫人を亡くされて一周忌を終えてからの旅立ちだった。午後葬儀を終えて、陳旻蘇中国人民対外友好協会会長と王效賢日中友好協会副会長他三名の方が母を訪問して下さる。陳氏は映画「敦煌」でお世話になった。父の亡くなる前年の九月に来宅され、父が亡くなった時は「井上靖をしのぶ詩篇」を作られた方である。

六月二十三日

「かえる会」が開かれる。場所は靖の生前行きつけの銀座のバー「葡萄屋」。靖の山行きの仲間の会。家族にも声をかけて下さり皆喜んで出席する。当時からなじみのアコーディオン弾きの「文ちゃん」も呼ばれて来ている。アコーディオンに合わせてそれぞれ懐かしい歌を歌う。母も手術後初めての外出。「早春賦」など三曲も歌う。

九月四日

県立神奈川近代文学館の方と清水節男氏来宅。前にお渡しした資料の整理が出来たので残りをいただきたいとのこと。十月二十四日にお渡しする予定。

九月六日

北上市現代詩歌文学館の篠弘館長、荒磯事務局長来宅。本館二階に井上靖記念室を作る計画。詩歌に関する原稿をいただきたいと願いに来られる。母、修一、小山さんといくよ。

九月二十八日

母の九十一才の誕生日。東京会館のオムレッツが食べたいと昨年の入院中から云っていたので東京会館へ行ってお祝いをする。母、甫壬、佳子、弓子、いくよ。

十月五日

「志賀直哉展」世田谷文学館。午後五

七月九日

「井上靖全集」を日本文学の研究をしている世界の大学や図書館に寄贈する件で、国際交流基金日本研究課の鈴木雅之氏を訪ねる。小山さんといくよ。

七月十七日

團伊玖磨氏を偲ぶ会。午後二時からホテルニューオータニ芙蓉の間。日中文化交流協会四十周年を記念して来日した中国文学芸術界連合会代表と中国人民対外友好協会代表を迎えての偲ぶ会。「ヴァイオリンとピアノのための fantasia 第一番」が献奏される。甫壬、佳子、いくよ出席。

七月二十五日

大雨。日南美術館での展覧会が終わり、夕方五時展示品が日通の美術梱包車で井上家に帰ってくる。浅田学芸員も一緒。小山さんは一つ一つの品物につい

てノートを見ながらチェックをする。

八月十九日

高原須美子さん死去。経済評論家で女性初の経済企画庁長官やフィンランド大使、セ・リーグ会長などをされた。父母が仲人をした数少ない方の一人。元旦には毎年家族三人でお祝いに来て下さっていた。

八月二十一日～二十九日

モンゴル旅行。恒雄と。ウランバートルおよびヘリコプターで数百キロ離れた南ゴビまで行く。モンゴルへは私は二回目。恒雄は初めて。モンゴル大学を訪ね、学長と図書館長にお目にかかる。「井上靖全集」の贈呈のこともあるので図書館を見学させていただく。立派な建物であったが日本の現代の本はあまり無い。

時三十分からの開催記念レセプションに出席。

十月二十五日

旭川市井上靖記念館の相談役会が十一時からクラブ関東で開かれる。高野昭氏、清水節男氏、古田館長、大西社会教育部長と私が出席。記念館の十周年にむけての展示と館の改造について話し合う。

日中文化交流協会主催の中国出版代表团、上海市文学芸術界連合の歓迎レセプションが三時から東京会館エメラルドルームで開かれ、佳子と出席。

十月三十一日

国際交流基金の鈴木氏と滝井氏、「井上靖全集」発行元の新潮社営業部山本信男氏と木島秀夫氏、全集担当の塙陽子さんが井上家に集合。全集の購入方法や保管場所などを打合わせる。小山さんといくよ。

十一月六日

「ふるさと叢書」に掲載する「父との北京・河南省の旅」の原稿を書き上げる。

十一月九日

米子「アジア博物館・井上靖記念館」の理事長であり井上靖記念文化財団の理事の横地治男氏がモンゴル大学より博士号を授与された。新高輪プリンスホテルパミール館で六時から祝賀会。

十一月十六日

スペインのサマランカ大学図書館へ一足早く「井上靖全集」を寄贈することになった。この図書館にはプリンスミチコの名がつけられている。

十二月七日

芹沢光治良氏を記念して「サロンマグノリア」をお嬢様方が主催。原稿、資

料、写真などが整理されて置かれていた場所でもある。四十数年間先生とともに過ごしたマゲノリアの木が庭にあり、講演、朗読、音楽などの文化行事がこのサロンで行われている。一時間ほど話をする。終わったあとのティータイムも皆さんと一緒に楽しい時間を持つ。

平成十四年

一月二十四日

小西甚右衛門氏のお別れの会。午前十一時三十分から東京会館で。八十一歳で亡くなられた小西さんには井上靖記念文化財団設立の折、大変お世話になった。父が晩年「日仏明日を考える会」（一九八一年、ミッテラン大統領と鈴木善幸首相の会談で設置）で提案した現代日本文学短編選集と詩選集のフランス語翻訳出版の仕事でもお世話になった。一九八七年五月フランスでの出版記念パーティーとシンポジウム

が終わった後、父母や大江健三郎氏、小西さんご一家と行ったヨーロッパ旅行は私にとって大変思い出深い。

一月二十六日

井上靖研究会が父の郷里天城湯ヶ島の白壁荘で四時から開かれる。研究発表は福田美鈴氏。『焔』時代の井上靖」靖は誰にでも分かってもらえる詩をめぐらしたと話される。夕食後は生前、靖がいつも泊まっていた離れの囲炉裏の間で懇親会が開かれる。お酒を友にしながら井上文学を中心に語り合い、十二時過ぎまで賑やかに行われる。

一月二十七日

あすなる忌、熊野山のお墓で。晴れ男の父にはめずらしく午前中は雨。毎年行われている命日のお墓参りが昨年は大雪のためお墓へは登れなかった。今年湯ヶ島町長をはじめ井上研究会の方々、長泉町の文学館友の会の方々、

地元の方々、井上家の者たちみんなでお参りをする。読書感想文応募作品も例年通りお供えをする。昨年五月に佐賀の植木屋さんに云われたように前日シャベルと肥料を持ってお墓に登り、瓊花の木の周辺に寒肥をたっぷり入れた。

天城温泉会館で、井上靖作品読書感想文コンクール表彰式が行われ、昼食後は町民劇団による「しろばんば」が上演され、立見席も出るほど超満員。

一月三十一日

第九回井上靖文化賞贈賞式と祝賀会。山の上ホテルで。彫刻家の安田侃氏が受賞。ご夫妻はイタリアから帰国され、息子や娘さん一家や各界の大勢のファンが出席して賑やかな心温まる会だった。授賞式の前日、私は東京都庭園美術館で開催されている安田氏の野外個展を佳子と見に出かけた。丸みのある穏やかな作品に気持ちがあこんだ。

二月二十日

旭川記念館報に「疎開の地、福栄村」の原稿を書き上げる。

平成十四年度

五月十日～六月九日

「井上靖展」酒田市美術館。日和山公園の中に氷壁の一文が書かれた文学碑がある。靖は除幕式、ミイラの取材など三回酒田を訪れている。私はオーブニングには欠席したので六月二十四日展示を見に酒田へ友人と出かける。大変モダンな建物で、広い庭には昨年井上靖賞を受賞された安田侃氏の彫刻があった。この展覧会の準備のために何度も会い親しくなっていた備前健吾学芸員がまもなく亡くなられたのは残念なこと。

五月十六日

国際交流基金の藤井宏昭理事長より、

母ふみが感謝状を頂く。代理で贈呈式に出席する。「井上靖全集」を日本文学および日本研究に業績のあった世界の国々の機関に贈呈するため一千万円の寄付をしたことに対する感謝状。

五月十六日～二十六日

「天平の薨」前進座公演。国立劇場大劇場。

六月六日

世田谷文学館友の会の方々四十名が井上宅へ来られる。生田美秋学芸員より頼まれていたので、質疑応答やいろいろお話をさせて頂く。

六月九日

井上靖の撮った写真展「フンザ、ナガール」。高月町図書館の中の井上靖記念室で展覧されている。現地で靖が撮影した古いフィルムを焼きのびし、パネルにして展示している。明定義人館

長の努力の賜物。滋賀県高月町井上靖記念室へ久しぶりで出かける。

六月十二日～十四日

旭川市立井上靖記念館の相談役会。来年度の記念館十周年に向けての展示館のリフォーム、展示換え等いろいろあり、本年は旭川で開かれた。清水節男氏、いくよ参加。

十一月十六日

「井上靖さんを偲ぶ会」東京会館十二階ロイヤルルーム。五時～七時。挨拶―黒井千次氏、三好徹氏。乾杯―熊井啓氏。栗原小巻さんのシルクロード詩集の朗読。詩集「地中海」の復刻版を差し上げる。とても華やかな暖かい父の十三回忌の会だった。

十一月十九日

安藤更生氏三十三回忌法要。井上家を代表してお参りする。安藤氏の「鑑真

和上伝」の研究がなかったら「天平の薨」は生まれなかったであろう。唐招提寺には父と氏の碑が立っている。毎年、命日にはお弟子さん達が集まって法要をされていることを伺い、先生はお幸せな方としみじみ思う。

十一月二十日

江上波夫氏の葬儀に出席。父が尊敬していた考古学者。アフガニスタン、イランの旅に父は同行している。晩年書き残された詩の終章

——絶対自由、絶対平和の世界夢みて大いなる銀河の道をわれ往かん、星となり師友尋ねて、われ一人往かん——

十二月十八日

母ふみが国際交流基金より紺綬褒章をいただく。母の代理で藤井宏昭理事長より頂いてくる。

平成十五年

一月十九日

米子井上靖記念館の友の会、理事会、総会に出席。米子井上靖記念館で。

一月二十六日

命日のお墓参り。十三回忌ということもあり熊野山墓参の参加者がいつもの年より多い。インターネットでのオフ会の若者の参加もうれしい。感想文の小中高の最優秀作品発表。町民劇団の「しろばんば」「グウドル氏の手套」など湯ヶ島弁を取り入れた脚色も楽しい。

一月二十八日

第十回井上靖文化賞贈賞式と祝賀会。山の上ホテルで。本間一夫氏と日本点字図書館が受賞。氏は五歳のとき盲人になられ、点字図書館を作られ、この道一筋。風邪のため、本間氏は欠席。息子さんが挨拶され「父は大変な働き者で日曜日が一番嫌いだった」と話さ

れる。一九六六年十一月、靖は「小説家の立場から」と言う題でこの図書館で講演をしている。

二月十日

旭川記念館報に「十周年によせて」を書き上げる。記念館開館の日から十年間のことを思い出しながら書くのは楽しくもあったがなかなか大変なことでもある。

平成十五年度

五月八日

神奈川近代文学館の学芸員藤本尚子、渡邊明子さん来宅。十月に開催される「井上靖展」の打ち合わせ。小山さんといくよ。

六月十九日

旭川井上靖記念館相談役会、クラブ関東で。十二時から。清水蓮雄館長、清

水節男氏、高野昭氏、私。記念館十周年に向けての打ち合わせ。

七月四日～六日

旭川井上靖記念館訪問。開館十周年を迎え、展示場がリフォームされ、不便だった企画展の展示ケースも増やした。何年も前から相談役会や私が旭川へ行った時にも皆で考えていただけに大変よくなった。正面の大きな靖の写真もとてもよい。

十月四日～十一月十六日

「井上靖展」神奈川近代文学館で開催。オープニングセレモニーには井上家一同出席、いくよ挨拶をする。期間中、次のような企画がある。

講演会 椎名誠「井上靖文学の舞台を歩いて」

朗読会 栗原小巻
映画会

「井上靖展」開催中の出来事

○出品物の資料の中に父が私どもに宛ててモスクワのホテルで書いた手紙が出てきた。切手も貼られ、きちんと丁寧に書かれた手紙で、投函されていなかったが、父の死後十三年もたつて現在の私の年齢より若い父からの手紙が届いた。

○「秋篠宮でございます」という一本の電話が私宅にあった。井上靖展を眞子様にお見せしたいという紀子妃殿下からであった。学芸員と共にご案内申し上げた。眞子さまは小学六年生、本がお好きで落ち着いた素晴らしい方だった。

○「崖」の原稿約二千枚を文学館に寄付したいという申し出があった。寄贈者は二十五歳の時アルバイトをしていた東京新聞で掲載の終わった原稿が当時処分されるのを惜しく思つて毎回集めて取っておき、アルバイトをやめた後も人に頼んで取って

おいてもらつて四十年間も保管されていた。奥様とご一緒にお目にかかり、大変感激した。

十月五日

「おろしや国酔夢譚——大黒屋光太夫漂流記」、劇団ファン・ファール公演。

十月九日

小学館相賀徹夫会長の母上（百三歳）を偲ぶ会。帝国ホテル孔雀の間で。十一時三十分より。修一といくよ出席。

十一月二十四日～二十七日

前進座「天平の薨」を北京、揚州、上海で公演。上海での最終公演を見る。若い人たちが気楽に芝居を見に来てくれる様子がわかり、好感が持てた。途中揚州の大明寺へも行く。鑑真和尚が日本へ行くことを決意したお寺である。恒雄と。

十二月七日

井上靖研究会、國學院大學たまプラーザ校会議室で。

研究発表

小尾真「井上靖における母の存在」

芦田栄子「おろしや国酔夢譚論」

終了後は佳子宅で親睦会。

平成十六年

一月十七日～十八日

米子井上靖記念館友の会理事・評議員会に出席。米子記念館で。

一月二十五日

靖命日の催し「井上靖と天城湯ヶ島」。合併して伊豆市となることに伴い、今年が最後となる。大変残念なこと。九時からの墓まいり、作文コンクール、「しろばんば」の劇。

二月二日

第十一回井上靖文化賞贈賞式と祝賀

七月十八日

井上靖研究会、クレマチスの丘の知求塾で開かれ、修一といくよ出席。

研究発表は小野寺蒼氏と小関一彰氏。終了後、親睦会。

八月三日～五日

旭川井上靖記念館へ。

九月二十二日

二木てるみの朗読劇「獵銃」を沼津文化センターへ佳子と聞きに行く。六時より。後に二木さんから頂いたお手紙には「『獵銃』は誰にも渡したくない私の宝」と書かれていた。

十月十五日

「井上靖と信州」出版発表とサイン会が長泉町の井上靖文学館で開かれた。信州を舞台にした小説は「伊那の白梅」から始まり、なんと十七作品もある。信州に住み、小説の舞台に立った

会。山の上ホテルで。古代史研究家の直木孝次郎氏が受賞。「井上先生の名作『額田女王』の罫に迫る作品を、歴史学の側から書いてみたいというのが、私の夢」と語られる。

三月三日

国際交流基金の広田崇夫、藤居真美氏が井上宅へ挨拶に来られる。平成十三年七月国際交流基金を初めて訪ねて以来二年と八ヶ月、井上靖全集を日本語や日本文学の研究に業績のある海外の大学や図書館へ入れ、本を通して日本人や日本の習慣や考え方を理解してもらおう。私にとっては靖の本を贈ることに意義があると思い、やってきたが、これで終わる。種は蒔いたのでこれから如何に芽を育てるかが課題であり、楽しみでもある。

三月三十日

新井已喜雄著「井上靖と信州」の帯の

ときの感動を写真と文にしてある。

十一月二日

鈴木之夫氏葬儀。前日の通夜に大仁へ。伊豆湯ヶ島の方で祖父の時代からの知人。「しろばんば」の会の会長をされていた。

十一月二十六日～十二月二十六日

宝塚星組公演。歌劇「花舞う長安 井上靖『楊貴妃伝』より」。東京宝塚劇場で。

十一月三十日

旭川市井上靖記念館の相談役会。クラブ関東で十一時より開催。荒川美智館長、清水、高野氏と私。平成十九年の生誕百年の事業について相談。

十二月四日

井上靖研究会、國學院大學たまプラーザ校会議室で開催。

原稿を書き上げる。

平成十六年度

五月六日

佐藤秀雄著「井上靖青春記」出版発表とサイン会が開かれ出席。長泉町の井上靖文学館で。沼津中学時代の交友関係を中心に描かれている。

六月十八日

星野重雄氏葬儀。前日の通夜に出席。靖の沼津中学時代から生涯を通しての友人で、家族ぐるみの付き合いだった。

七月十四日

沼津文学祭Ⅱ「井上靖と沼津」が来年開かれるので初顔合わせをする。斉藤衛市長、工藤達朗教育長にも挨拶に行く。四方一弥氏、松本井上文学館館長、担当の大澤敏夫氏と私、東急ホテルで顔合わせをし、共に食事をする。

発表は小田島本有、藤澤全氏。終了後居酒屋「魚屋」で親睦会。

平成十七年

一月二十一日～一月二十七日

ベトナムの首都ハノイにある国家図書館に井上靖全集を贈呈する。贈呈式に恒雄と出席する。海外の日本文学研究に実績のある機関に井上靖の全集を入れる活動をしているのを聞かれた駐ベトナムの服部則夫大使がベトナムにもということになった。国家図書館のホールには七十名ぐらいの関係者が集まった。大使や図書館長の挨拶に続き私の挨拶。締めくくりとして「――ベトナムは近年日本との関係が深まり、日本に関心を持ち、日本語を勉強されている方が増えていると伺っています。このたびの寄贈をきっかけとして多くの方に井上靖の作品を読んで頂き、作品をとおして日本人の物の考え方を理解して頂きたい」。テレビやラジオの

取材も沢山受け、アビールもしてきたつもり。

二月一日

第十二回井上靖文化賞贈賞式と祝賀会。山の上ホテルで。詩人で弁護士、日本近代文学館館長でもある中村稔氏が受賞。

三月二十五日

旭川井上靖記念館の館報に「海外に井上靖全集を贈る」の原稿を書き上げる。

三月二十八日～四月四日

オーストラリア行。恒雄と。春休みを利用してシドニー在住の従兄弟大谷正矩、百江夫妻を訪ねる。オーストラリアの国にはまだ、井上靖全集を贈っていないので資料を持参する。大谷は私の願いをすぐ理解して日本総領事館へ同行してくれる。そこで私が今までしてきた世界の国五十五機関への全集の

十二月四日

井上靖研究会、國學院たまブラザ校会議室。講演―藤澤全、研究発表―小田島本有。

平成十八年

一月十四日

「氷壁」NHKで六回番組。夜九時から。靖の人気代表作。山もナイロンザイルも人の名前も現代風にかえてある。

一月十八日

碑建立。除幕式。静岡新聞敷地内で。十一時より。佳子と出席。自伝小説「夏草冬濤」の舞台となった沼津に北ロータリークラブが創立四十五周年を記念して富士山を型どった碑を市に寄贈した。町内を流れる狩野川について語られている部分を碑文にしたもの。祝辞を述べる。暖かい穏やかな日だったので帰途、靖が当時下宿していた妙覚寺の庭にある沼津中学時代の友人た

贈呈のことなど私の思いを伝える。何処の大学へ寄贈したら一番よいかを調べ、日豪交流年の政府のイベントに参加出来るよう努力してみるといふ返事に嬉しく思う。

平成十七年度

七月二十日

「沼津文学祭Ⅱ」実行委員会。沼津市文化センターで。実行委員会は頻繁に開かれているが以降記さないことにする。

九月十日

沼津文学祭Ⅱ「井上靖と沼津」の宣伝をかねて頼まれ、「夏草冬濤の磯村少年」を書き上げポストする。十月三日の静岡新聞に掲載される。

九月十六日

国際交流基金を大谷正矩氏と訪問。来

ちとの詩碑を訪ね、父をしのぶ。

三月二十三日

沼津文学祭Ⅱ「井上靖と沼津」の最終委員会開催。九時より。市の教育委員会より頼まれた「沼津文学祭」開催実行委員、助言者としての任務は終了。

三月二十五日

旭川井上靖記念館報に「無形の財産を」の原稿を書き上げる。

年の日豪交流年のイベントに井上靖全集の贈呈式関係の行事が加えられることになり、文化企画課長の辻本勇夫氏を訪ねる。ご挨拶、お願い、質問などをしてくる。

十月二十二日

「沼津文学祭Ⅱ」の行事「洪作少年の歩いた道」。沼津市民とバス二台で天城路をたずねる。お墓、旧井上邸、小学校、お宮、他。よい天気だった。

十一月三十日

「沼津文学祭Ⅱ」行事。詩と音楽の饗宴。六時～八時半。市民による「シルクロード詩集」井上靖書の朗読と二胡、馬頭琴の演奏。

十二月三日

「沼津文学祭Ⅱ」。基調講演―曾根博義、朗読―栗原小巻、二胡―張照翔、対談―井上修一・曾根博義。

事業報告

井上修一（常務理事・プール学院大学学長）

平成十三年度から十七年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

（一）井上靖文化賞発表ならびに贈賞

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました贈賞対象者を、数次にわたる選考で四氏に絞り込んだ後、選考委員の先生方による最終選考会が毎年十一月に山の上ホテルで行われ、その結果は直ちに報道、出版関係者に通知されます。

平成十三年度は彫刻家「安田侃氏」に第九回贈賞が決まり十四年一月三十一日に、百五十名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀

会が行われました。

平成十四年度は「本間一夫氏と日本点字図書館」に第十回贈賞が決まり十五年一月二十八日に山の上ホテルにて贈賞式、祝賀会が行われました。

平成十五年度は古代史研究家「直木孝次郎氏」に第十一回贈賞が決まり十六年二月二日に山の上ホテルにて贈賞式、祝賀会が行われました。

平成十六年度は詩人「中村稔氏」に第十二回贈賞が決まり十七年二月一日に山の上ホテルにて贈賞式、祝賀会が行われました。

平成十七年度は十一月の選考委員会にて書家「篠田桃紅氏」に決定、直ちにご本人に受賞の意思を確認して発表したところ、後日ご本人より辞退のお申し出が

あり、残念ながら第十三回は「受賞者なし」となりました。

なお、選考委員の先生方は大岡信、菅野昭正、樋口隆康、平山郁夫の四氏です。また、この事業は一ツ橋綜合財団のご協力を得て行われています。

（二）海外における日本文化の研究者または研究団体に対する援助

先年来、国際交流基金の協力を得て「井上靖全集」（全二十八巻 別巻一卷 新潮社）を海外の主要大学日本文学科、日本文化センターならびに図書館など計五十五機関に寄贈する準備を進めていました。十三年度の一部発送が始まり、十四年度には五十大学分を、十五年度には残りの五大学分を終了しました。

十六年度には本財団独自でベトナム国立図書館へ寄贈しました。また、十七年度は二〇〇六年日豪交流年認定事業の一環として、シドニー大学に全集を寄贈するとともに、豪州における日本文学の研究奨励のための井上靖奨学金を設立する準備を行いました。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

平成十三年六月五日から七月十五日まで、鳥取県日南町美術館にて開館五周年記念特別展「井上靖が撮った写真展——アフガニスタン・イランの旅から」が開催され、展示資料の出品をはじめ全面的な協力を行いました。

平成十三年七月二十日から十月十四日まで、長野県軽井沢高原文庫にて行われました「二十世紀と軽井沢」展（戦後編）に資料を提出しました。

平成十三年十月に行われた沼津東高校百周年記念文化祭に原稿・資料を出品しました。

平成十四年三月一日から六月十六日まで、滋賀県高月町立図書館にて行われた「井上靖の撮った写真展『フンザ・ナガールの旅から』」を後援しました。

平成十四年五月十日から六月九日まで山形県酒田市美術館にて行われた「井上靖展——文学の軌跡と美へのまなざし」を共催しました。

平成十四年五月二十五日から五月三十一日まで北上市立日本現代詩歌文学館で行われた井上靖直筆原稿展

示会に協力いたしました。なお、同館に「井上靖記念室」が開設されました。

平成十四年六月六日に行われた世田谷文学館主催「文学散歩」に協力しました。

平成十四年十月二十七日から十一月九日まで、福井県丸岡町民図書館特別展示室にて、「中野重治生誕百年記念——重治と関わった作家展」に資料を提供しました。

静岡県長泉町井上靖文学館にて行われた、平成十四年十月三十一日から十二月二十三日の写真展「フンザ・ナガールの旅から」、平成十五年一月九日から三月十一日の「井上靖と信州」、「名作と写真展——その一」に資料提供しました。

平成十五年三月二十七日から七月十五日まで高月町立図書館にて行われた「井上靖の撮った写真展『アフガニスタン一九七三』」を後援しました。

平成十五年七月から十二月までの旭川市立井上靖記念館で行われた「開館十周年記念特別展示」を後援しました。

平成十五年十月四日から十一月十六日まで県立神奈川近代文学館にて行われた「井上靖展」を後援しました。

長泉町の井上靖文学館にて行われた、平成十五年七月の「井上靖作品読書感想文コンクール——入選感想文と資料展示」、十月二日から一月二十七日の「井上靖のシルクロード・遺跡」(写真展)、平成十六年一月二十九日から三月十六日の「詩碑と歩く、井上靖と歩く——今、静岡県東部の詩碑十五・写真展」を後援しました。

平成十五年十月四、五日北沢タウンホールでの劇団ファン・ファール第五回公演「おうらら・ろうど——大黒屋光太夫漂流記」を後援しました。

長泉町の井上靖文学館にて行われた、平成十六年四月二十二日から七月二十日の「しろばんばの『夏・冬』六十ヶ所めぐり」(写真展)、九月三十日から十二月十四日の「新井巳喜雄の『井上靖と信州』」展を後援しました。

平成十七年七月二十三日から十二月三日まで沼津市

主催「第二回沼津文学祭——井上靖と沼津」の各種企画に協力しました。また沼津文学祭企画雑誌「井上靖と沼津」が本財団後援で刊行されました。

長泉町の井上靖文学館にて行われた、平成十七年四月七日から七月十二日の「井上靖を見つめた写真家たち」(写真展)、七月二十一日から十一月十五日の「Yonde プンぶん二〇〇五」、十一月二十五日から平成十八年三月二十八日の、「詩で見る井上靖」展、一月十二日から三月二十八日の「氷壁」展を後援しました。

(四) 井上靖に関する資料の収集及び調査研究

蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。

なお、長年整理を続けていました生原稿・書簡・資料等の内、詩に関するものを除いたすべてを、平成十三年十月二十四日に神奈川県立近代文学館にお納めしました。

詩に関する生原稿・書簡・資料等は平成十三年十一

月十七日、北上市立日本現代詩歌文学館にお納めしました。これで創作に関するすべての資料を公的な機関にお納めできたことになります。財団としては大きな責任を果たすことが出来、心から喜んでおります。

また、十三年度から「井上靖研究会」(平成十一年六月二十三日発足、國學院大學教授荻久保泰幸会長、平成十四年十月より傳馬義澄会長)の団体会員に入会しました。同研究会は研究機関誌「井上靖研究」を刊行しています。機関誌刊行のために平成十三年度と平成十四年度は五万円を、平成十五年度よりは十万円の助成をしています。

更に、財団の事務所があります駒場の日本近代文学館にも平成十五年度より資料収集用の資金として十万円の助成をしています。

(五) 井上靖に関する講演会の開催

平成十三年六月五日に鳥取県日南町美術館にて行われた井上靖に関する講演会に本財団より講師を派遣しました。

平成十四年十月十五日に日本大学で行われた井上靖に関する講演会に講師を派遣しました。

平成十六年九月十七日に今治市で行われた今治城築城四百年記念文化講演会に井上靖と四国に関する講演を行うため講師を派遣しました。

平成十七年十二月三日沼津市で行われた第二回「沼津文学祭」の講演会「井上靖——人と作品」に講師並びに対談者を派遣しました。

(六) その他

平成十四年一月「天城湯ヶ島ふるさと叢書第十一集 天城湯ヶ島からの発信——国際化時代の井上靖」平成十五年一月「天城湯ヶ島ふるさと叢書第十二集 地域文化のポリフォニー——井上靖を考える」、平成十六年一月「天城湯ヶ島ふるさと叢書第十三集 天城の人と文化の融合——思い出の井上靖」が本財団協賛で刊行されました。

平成十四年一月二十六日、平成十五年一月二十六日、平成十六年一月二十五日、静岡県田方郡天城湯ヶ島町

墓地にて同町主催、本財団ならびに静岡県長泉町の井上靖文学館共催の墓参会「翌檜忌」が行われました。また、同日に天城湯ヶ島町「天城温泉会館」にて同町主催、本財団協力で第十回、第十一回、第十二回の「井上靖作品読書感想文コンクール」入選者表彰がありました。

なお、井上靖の故郷天城湯ヶ島町は、市町村合併で、伊豆市となり、湯ヶ島町が主催してくださった各種事業は残念ながらこれで終わりとなりました。これまでのご尽力に心より感謝いたします。

(七) 役員

平成十三年四月一日、スルガ銀行代表取締役社長兼CEO岡野光喜、新潮社社長佐藤隆信の両氏が理事にご就任下さいました。平成十五年四月一日、評議員としてご指導いただいております作家の黒井千次、三好徹両氏に理事にご就任いただきました。また、平成十五年四月一日に日本臓器製薬株式会社代表取締役社長小西龍作氏、平成十六年九月十六日に、日本大学教

授曾根博義氏、平成十七年四月一日に、歌人で日本現代詩歌文学館館長の篠弘氏並びに新潮社図書編集室の伊藤暁氏が評議員にご就任下さいました。また、本財

団設立当初から監事としてご指導いただいております東洋製罐株式会社代表取締役社長三木啓史氏に理事にご就任していただき、新しい監事には大成温調工業株式会社代表取締役社長水谷大介氏にご就任下さいました。平成十八年四月一日より、静岡県立静岡がんセンター総長兼研究所長山口建氏が理事に、評議員として活躍いただきました浦城幾世氏が理事に、元茨城大学講師井上甫壬氏が評議員に就任することになりました。いろいろお忙しい中とは存じますが、なにとぞよろしく願いますとともに、厚く御礼申し上げます。

また、平成十七年三月三十一日、ご都合により評議員の小島民雄氏のご退任になりました。これまでのご指導、ご尽力に心より御礼申し上げます。

役員の内、平成十三年には、上林吾郎理事、高原須美子評議員が、平成十四年には、小西甚右衛門理事が、

平成十六年には嶋中雅子評議員がお亡くなりになりました。生前の御厚誼に心より御礼申し上げます。

平成十八年四月一日現在、本財団の理事、評議員は次の方々です。

理事長	井上ふみ
常務理事	井上修一
理事	浦城幾世 大岡 信 相賀徹夫 岡野光喜 黒井千次 佐藤隆信 高碕芳郎 野間佐和子 平山郁夫 三木啓史 三好 徹 山口 建 横地治男
監事	水谷大介
評議員	伊藤 暁 井上卓也 井上甫壬 大越幸夫 大波加弘 角川歴彦 黒田佳子 小西龍作 篠 弘 曾根博義 高野 昭 緑川 亨

(五十音順)

図書だより



平成十三年度から十七年度に出された井上靖に関する本、冊子、論文などをご紹介します。

【研究書】

- 松本昭『人間復活』二〇〇一年九月、アールズ出版
- 高木伸幸『井上靖研究序説——材料の意匠化の方法』二〇〇二年七月、武蔵野書房
- 佐藤英夫編著『井上靖青春記』（駿河新書四）二〇〇四年五月、英文堂書店
- 福田美鈴『わが心の井上靖——いつまでも「星と祭り」』二〇〇四年六月、井上靖文学館
- 新井巳喜雄『井上靖と信州』二〇〇四年十一月、新風舎

- 藤澤全編著『井上靖——グローバルな認識』二〇〇五年四月、大空社
- 柳谷隆幸『井上靖について』二〇〇五年十二月、碧天舎

【その他関連書】

- 川西政明『昭和文学史 下巻』二〇〇一年十一月、講談社
- 杉山平一『戦後関西詩壇回想』二〇〇三年二月、思潮社
- 藤澤全『言語文化の諸相——近代文学』二〇〇四年四月、大空社
- 工藤茂『姨捨の系譜』二〇〇五年二月、おうふう

- 深野一郎『これまでの登山、これからの登山』二〇〇六年一月、本の泉社

【冊子】

- 『井上靖展』神奈川文学振興会編、神奈川近代文学館発行、二〇〇三年十月
- 『井上靖『しろばんば』・『夏草冬濤』 洪作少年の歩いた道』（平成十五年地域振興推進事業 東部県行政センター 伊豆文学散歩事業報告書）井上靖文学散歩研究会編、二〇〇四年三月
- 『井上靖と旭川』旭川市井上靖記念館編、松田忠男発行、二〇〇四年三月
- 『井上靖と沼津』勝呂奏編、沼津文学祭開催実行委員会発行、二〇〇五年十二月
- 『熊野の文学と伝承』（みえ熊野の歴史と文化シリーズ 六）みえ熊野学研究会編集委員会編、みえ熊野学研究会発行、二〇〇六年

【天城湯ヶ島町ふるさと叢書】

- 天城湯ヶ島町「ふるさと叢書」編集委員会編、天城湯ヶ島町・天城湯ヶ島町教育委員会発行
- 『天城湯ヶ島町ふるさと叢書第十一集 天城湯ヶ島からの発信——国際化時代の井上靖』二〇〇二年一月
- 『天城湯ヶ島町ふるさと叢書第十二集 地域文化のポリフォニー——井上靖を考える』二〇〇三年一月
- 『天城湯ヶ島ふるさと叢書第十三集 天城の人と文化の融合——思い出の井上靖』二〇〇四年一月

【論文・記事】

- 川西政明『日本文学館紀行（十九）井上靖文学館（静岡県駿東郡長泉町）——富士は父、天城は母、そして中国への夢』（『潮』二〇〇一年七月）
- 村井英雄『養之如春』（四）ある日の井上靖」（『文芸論叢』二〇〇一年九月）
- 山本皓一『絶滅希少人間図鑑（十五）井上靖、おろしや国を往く』（『諸君』二〇〇一年十月）

- 高木伸幸「報告書『ナイロン・ザイル事件』の活用——井上靖『氷壁』補考」(『近代文学論集』二〇〇一年十一月)
- 加藤九祚「『おろしや国酔夢譚』をよむ——故国はもうひとつの流刑地だった」(『月刊みんぱく』二〇〇一年十二月)
- 勝呂奏「井上靖『わが母の記』論——まなざしの行方」(『奏』二〇〇一年十二月)
- 西座理恵「井上靖の作品における〈異界〉」論——『猟銃』・『通夜の客』を通して」(『國學院大學大学院紀要 文学研究科』二〇〇二年度)
- 川本三郎「本社『文藝春秋』写真部 蔵出し写真館(二十五) 井上靖 大人の恋愛を描く」(『諸君』二〇〇二年七月)
- 「人間ドキュメント 手紙の中の日本人(二十九) 土門拳から井上靖への手紙」(『読売ウィークリー』二〇〇二年十一月)
- 新井巳喜雄「井上靖と信州」(『長野県国語国文学会研究紀要』二〇〇二年十二月)

- 芦田栄子「井上靖『あすなる物語』試論——〈生と死〉を超えるもの」(『神女大國文』二〇〇三年三月)
- 荒木燈環「井上靖『補陀落渡海記』について」(『皇学館論叢』二〇〇三年十月)
- 秦恒平「井上靖の詩の魅力」(『神奈川近代文学館』二〇〇三年十月)
- 勝呂奏「井上靖『孔子』ノート——『迅雷風烈』」(『奏』二〇〇三年十二月)
- 尾添陽平「理想とする『歴史小説』『歴史小説家』のありかた——『蒼き狼』論争における大岡昇平の言説」(『日本文芸研究』二〇〇三年十二月)
- 柳田邦男「もう一度読みたかった本(二) 自己形成の情景——井上靖『あすなる物語』」(『月刊百科』二〇〇四年一月)
- 小埜裕二「井上靖『櫻の木』について」(『イミタチオ』二〇〇四年二月)
- 宮本勝「講演」小説『孔子』を読んで——井上靖の『論語』の読み方」(『旭川国文』二〇〇四年三月)
- 曾根博義「『取引き』としての父子関係——井上靖

- 文学の父親像(特集 近代文学に描かれた父親像)」(『国文学』二〇〇四年四月)
- 勝呂奏「井上靖『娼捨』ノート」(『奏』二〇〇四年十二月)
- 谷川栄子「井上文学の中国における位置——『井上靖文集・三卷』等から」(『国際文化表現研究』二〇〇五年)
- 藤澤全「井上靖の『壺』と老舎の悲劇」(『国際関係研究』二〇〇五年二月)
- 芦田栄子「井上靖『おろしや国酔夢譚』論」(『神女大國文』二〇〇五年三月)
- 堀田力「ロッキード捜査の苦悩の中 井上靖『あすなる物語』(人生の危機に読む本—愛する人の死、突然の大病、仕事の挫折—困難の時を癒してくれた三十一冊の書)」(『文芸春秋』二〇〇五年七月)
- 新井巳喜雄「井上靖と川——人生を生きる美学」(『長野県国語国文学会研究紀要』二〇〇五年十一月)
- 山田哲久「井上靖『補陀落渡海記』論——『永祿八年』という虚構」(『同志社国文学』二〇〇六年三月)

- 藤澤全「井上靖の詩編のスカイライン——映画LA ROUTE 他との関わりの中で」(『国際関係研究』二〇〇六年三月)
- 梅本順子「井上靖の『おろしや国酔夢譚』——異文化理解と語学教育を中心に」(『国際関係研究』二〇〇六年三月)
- 【井上靖研究会の研究機関誌】
- 井上靖研究会編、傳馬義澄・井上靖研究会事務局発行
- 『井上靖研究 第一号』二〇〇二年一月
- 『井上靖研究 第二号』二〇〇三年七月
- 『井上靖研究 第三号』二〇〇四年七月
- 『井上靖研究 第四号』二〇〇五年七月

『伝書鳩第七号』ができました。

遅くなり皆様にご迷惑をおかけしたことを、お詫びいたします。

しかし完成してみれば多くの執筆者の参加を得た暖かな号となり喜んでおります。

さて、このたび井上靖の孫に当たる承子が夫・西村篤とともに『伝書鳩』の編集の責任を受け継ぐことになりました。

私も今後企画などの一部には携わってまいります。どうぞ皆様、今後ともよろしくお願いいたします。

黒田佳子

今号から『伝書鳩』の編集に携わるようになりました。

井上靖の孫（井上修一の末娘）の西村承子です。

微力ながら懸命に取り組んでいく所存ですので、どうぞよろしく願います。

西村承子

伝書鳩 第七号

発行 二〇〇七年二月二十二日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九

印刷所 モリモト印刷株式会社

発行所 (財)井上靖記念文化財団